

## 序―記憶と想像・創造

前川啓治

想像は未来のためだけにあるのではない。過去の記憶が果てるところに想像が生まれる。

古いアルバムを引つ張り出し、古写真を見ると、その時代と人々を想い出す。民家や通りが変わってしまっても、人々が老いてしまっても、その「とき」は記憶として残っている。あるのは過去ではなく、現在における過去の記憶、現在における過去への想いなのかもしれない。

過去の記憶は、物語のように蘇り、脳裏をめぐる。そこに過ぎし時への想いが、ときに楽しく、ときに憂いを伴い、しかし結局はいとおしく背景として浮かび上がってくる。

そこに「歴史」はない。構造的な時間の持続があるだけだ。もし、歴史が客観であるのなら、記憶は心的な地層を育むものなのだろう。

歴史の客観は、しかしわれわれの「記憶」のうちに照射される。そして、遺跡や資料という土地の「記憶」の源が辿れないところに、「神々」の世界が在る。

筑波山には、筑波男大神つくばのおおかみ 伊弉諾尊いざなぎのみこと、筑波女大神つくばめのおおかみ 伊弉冉尊いざなみのみことの男女神が御座す。しかも、春先と秋に御座替りがあり、祭祀が執り行われる。豊穰神である。冬には山頂の祠に、夏にはかつては麓の臼井地区に近い六所神社ないしは稲野神社（現在は飯名神社と称する）に御座したといわれている。その名残として、今でもつくば道の六丁目の石の鳥居まで神輿が担がれ降りて来る。つくば道とは、江戸時代に徳川家光によって神社建築のために造られた資材運搬用の道である。

歴史の時代に入ると、万葉集に、常陸守の藤原宇合の下僚高橋連虫麻呂が、「筑波嶺に登りて嬿歌会をする日に作る歌一首并せて短歌」として、次のような歌を残している。

鷺の住む 筑波の山の 裳羽服津の その津の上に 率ひて 未通女壮士の 往き集ひ かがふ嬿歌に  
 他人妻に 我も交む 我が妻に 他人も言問へ この山を 領く神の 昔より 禁めぬ行事ぞ 今日のみは  
 めぐしもな見そ 事も咎むな

(『万葉集』九卷一七五九)

反歌

男神に 雲立ち登り 時雨ふり 濡れ通るとも 我婦らめや

(『万葉集』九卷一七六〇)

〔通釈〕

鷺が住む筑波山の、裳羽服津という水辺のほとりで、誘い誘われ、若い男女が集まり歌い踊るこの嬿歌で、人妻に私も契ろう。私の妻に、他人も言い寄るがよい。この山を治める神が、咎めぬ行事だ。今日だけは、見苦しいとは見るな、咎め立てするな。

反歌

男神の峰に雲が立ちのぼり、時雨が降り、着物を通つて肌を濡らしても、帰ったりはしない。

『常陸国風土記』にも嬿歌（歌垣）のことは触れられている。嬿歌の歌や踊りの集いが行われた裳羽服津という水辺が筑波山のどこの地点かは定かでないが、飯名神社ないし夫女が原のあたりという説もある。

ここから小山を越えて南の平沢には、奈良・平安時代初期に官衙（役所）が置かれていたとされ、高床の校倉や板倉、大溝跡、柵址といった遺跡が復元されており、例年一〇月末ないし一一月初めには、つくば四大まつりの一つ「つくば物語」において、歌や舞が披露され、オカリナなどの楽器演奏が行われている。

さらに南の鎌倉時代以降小田氏の居城であった小田城は、南北朝時代に南朝方の北畠親房が『神皇正統記』を著したことで名高い。現在、県と市による小田城址の保存・整備事業が継続し、二〇一八年ごろには小田城の復元が完了し、歴史広場として公開される予定である。

一方、北条には多気氏が城を構え、小田氏と戦ったとされており、そのことは今でも、北条と小田の住民に語り継がれている。徳川家光が筑波山を鬼門とし、保護する一環として造成したつくば道の北条は、江戸時代以降、明治、大正、昭和と門前町として繁栄し、今も当時の土蔵や店蔵などが残っている。いまなお、よい意味で、昭和の雰囲気が残る商店街であるが、奇しくも平成二四（二〇一二）年の竜巻は、この北条商店街の西半分を直撃したのである。

こうした人々の「記憶」に対して、筑波山自体が持つ「記憶」はその山の地層に埋め込まれている。あるいは、巖岩に表出している。現在、県と筑波山周辺の各市および関連組織とで、ジオパーク構想が進められている。人々の「記憶」を超えたはるかな時間の中の、筑波山の持つ記憶を明らかにしてくれるだろう。

筑波山を総体としてとらえるこうした試みは、「環筑波山文化圏」というものを想起させる。神代の昔から現代にいたるまで、人々の生の営み、すなわち文化というものは、筑波山の存在と、その山に対する人々の想いによって形作られてきたことはいまでもない。

高橋連虫麻呂は、「筑波山に登る歌一首 并せて慰歌」として、次のように詠んでいる。

草枕 くさまくら 旅の憂 うれへを 慰 なぐさもる 事もありやと 筑波嶺 つくはねに 登りて見れば 尾花散 せばなる 師付 しづくの田井 かひに 雁 かりがねも

寒く来鳴きぬ 新治の 鳥羽の淡海も 秋風に 白波立ちぬ 筑波嶺の吉けくを見れば 長き日に 思ひ積  
 み来し 憂へはやみぬ (『万葉集』九卷一七五七)

反歌

筑波嶺の 裾廻の田井に 秋田刈る 妹がり遣らむ 黄葉手折らな (『万葉集』九卷一七五八)

〔通釈〕

旅のさびしさを忘れさせてくれるかと筑波の山に登り見やれば、すすきの穂の散る志筑(地名)の田には雁も寒そうに来て鳴いた。新治の鳥羽の湖も、秋風に白波が立っていた。筑波山の眺めの良さに、長い日々こころに積もっていたさびしい思いも消えた。

反歌

筑波山の山裾の田んぼで秋の刈入れをしている娘にやる黄葉の枝を折ろう。

万葉の時代から、筑波山は憂いを忘れさせる癒しの山であった。筑波山はそれを記憶している。千幾百年の時を経てわれわれは想像するしかない。筑波山を歩き、その景色を味わい、かつての筑波山の「とき」を想像し、また自らの筑波山の「とき」を創造することによって、われわれの日々の憂いも消えていくことであろう。

(引用の訓読文は、芳賀紀雄氏「『万葉集』筑波嶺の歌Ⅰ〈資料 万葉集諸注集成〉筑波大学」を参考にしてい  
 る。最初の歌は中西進『萬葉集 全訳注原文付』および佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之『萬

葉集』(新日本古典文学大系)、次の歌は小島憲之・木下正俊・東野治之『萬葉集』(新編日本古典文学全集)を主として引用し、筆者が若干加筆・修正している。)

\*

\*

\*

さて、本書のタイトルは、『筑波山から学ぶ―「とき」を想像・創造する』となっているが、このタイトルには二つの意味が込められている。「筑波山を学ぶ」ということであれば、筑波山について学ぶということであり、筑波山を理解する対象として設定しているということである。

しかし、なぜここで筑波山をとくに対象として取り上げるのか。「そこに山があるからだ」という言い方はできるであろう。が、それだけではない。神代の時代から現在にいたるまで、筑波山をめぐる地域には特段に豊かな文化圏が築かれてきたからである。「環筑波山文化圏」とわれわれが名づけるそうした文化圏の存在と、その長年にわたる豊かな展開があるからこそ、「筑波山から学ぶ」ことに大きな意義があるのである。

さらにこれに関連し、「筑波山から学ぶ」には、もう一步進んだ意味が見出せる。この「筑波山から学ぶ」には、「筑波山から学ぶこと」から学ぶ」という意味が込められている。つまり、われわれは筑波山から種々さまざまなことを学ぶのであるが、そうしたわれわれの学んでいく行為自体をも対象化してみようということである。

われわれの学び、つまり、われわれが対象化し取り上げることによって理解したものを、環筑波山の文化として再認識することからさらに一步進んで、そうした文化を今後の地域の発展に利用しようということである。文化を「認識する」だけではなく、文化を「行為する」という、より大きな枠組みによって、筑波山という対象に取り組むことである。それは、「環筑波山文化圏」の文化の資源化を目指し、地域のこれまでの長い文化の歴史を、未来に投影しようという試みであり、今後、「環筑波山文化圏」に根差した地域づくりに資するものとなる。

このように筑波山とその環筑波山地域の今後の発展を考えた場合、「筑波山から学ぶ」ことの必要性と重要性とが明らかになる。

かつてこの地域では、筑波山自体が御神体とされていた。頂上に登れば神代の時代、山腹を歩けば耀歌（歌垣）が行われていた万葉の時代、復元された平沢官衙（役所）遺跡を見れば奈良・平安の時代、そして北畠親房によって『神皇正統記』が書かれた小田城跡が修復されれば中世の時代、さらに古民家が残る北条を歩けば江戸時代後期および明治期の世界が、今なお想像される。竜巻被害で減ったとはいえ、北条商店街の種々の看板は、昭和の雰囲気をも十分に味わわせてくれる。たった数キロ歩くだけで、神代の時代から昭和までを、象徴的な遺跡や街並みが想像させてくれる地域は、日本全国この地域をおいてほかにないであろう。空間が時間を想起させてくれる類いまれな世界なのである（さらに、ここから十数キロ南に行けば、未来を想起させてくれる筑波研究学園都市にいたる）。そして、「おわりに」でも触れているが、この世界をフットパスでめぐるコース設定が現在進んでいる。（カパー裏の筑波山麓フットパス・マップ参照）

\*

\*

\*

以下、簡単に各章の概略に触れておこう。

## 第一部 筑波山から学ぶ

第一章は、郷土史家による筑波の歴史と文化の概略についての叙述である。廃仏毀釈や天狗党の居留による動乱などからか、筑波山に関する史料は限られているといわれているが、筑波山麓についての史料や遺跡は、むしろ

る豊かである。筆者は、筑波山信仰をもとにした宗教文化圏を想定し、六所神社や飯名神社、御座替祭の存在意義を明らかにしている。また、奈良時代の官衙の遺跡保存運動・復元整備を行ってきた筆者自身によって、平沢官衙についての説明がなされている。

さらに、かつて名を馳せた平将門の子孫の一族多気氏の隆盛が日向廃寺や五輪塔の存在に触れながら明らかにされ、小田城を居城とした小田氏の治世下、極楽寺に止住した僧忍性にんしやうらによる仏教文化の興隆について述べている。

第二章では、『日本書紀』や『続日本紀』などで知られる六国史と『常陸国風土記』の記述を比較し、『常陸国風土記』「筑波郡条」の著名な一説である筑波山と富士山に宿る神と大和の神とのやりとりを、常陸国と駿河国に対する朝廷・律令政府のイメージとして読み取り、そこからさらに耀歌（歌垣）の意味を明らかにしている。

奈良時代の末、会津・磐城から筑波へと東国布教を行い、中禅寺（現在の<sup>大御堂</sup>）を開創したのは僧徳一であるが、空海とのやりとりや、教学の最澄と（実践による徳一）の間の宗教論争から南都仏教との結節を読み取り、中央と地方の文化を結びつける役割を担った徳一のあり方とその時代性を提示している。

第三章は、夏季の祇園祭についてである。小田の八坂神社の祇園祭礼の始まりを、土浦藩主、土屋相模守が武運長久祈願の目的で神輿を寄進したこととしている。大獅子が特徴的であり、現在、集落「境界」で神輿と獅子の對抗儀礼が行われるが、元来は神輿が御幸する際の露払いとしての役割を負っていた。獅子とモク（御神藻）および神馬の意味が取り上げられ、鎮送儀礼としての位置づけがなされている。

行方なまがた市麻生八坂神社馬出し祇園では、素戔嗚尊すさのおのみことに擬された神輿によって八岐大蛇やまたのおろちとして象徴化された神馬が「馬追い」される。この行事も鎮送儀礼とされるが、より祝祭的な性格が強められている。こうして両者の共通性が示されるが、祇園祭の行われる時期から収穫儀礼としての側面も見出し、稲と麦の収穫時期による時間的な「境界」観念と結びつけている。

第四章では、祭りと祭礼を取り上げて、祭りを、神迎え—饗応—神送りという一般型としてとらえる一方、祭礼を、行列を伴い見物する観客がいるものとし、主要な祭儀は昼間、夏季に行われるものが多いとしている。

まず、伝統的な都市の祭礼としての石岡市の常陸国総社宮大祭を、目新しい要素が加わり観客を楽しませる側面が増えているが、祭りの一般型が守られており、「祭り」の延長上にあると位置づけている。次に、新しい都市の祭礼としての「まつりつくば」に、祭りの基本形である神迎えに相当する部分の神事が欠落している点を指摘しながらも、人々の精神的紐帯となるものを補う心情を読み込もうとしている。最後に、土浦市の佐野子で行われている「盆綱ぼんづな」という習俗に、神仏を共同の力によって運び、その守護の下にありたいという心情を見出している。

第五章は、近代の出来事についてである。土浦に海軍航空基地があったことを知っている人は多いかもしれない。筆者はまず、陸海軍の基地が、まるで筑波山を取り囲むかのように設置されていたことを指摘する。この点を踏まえ、筑波山周辺に設置された陸軍飛行場や海軍航空基地で飛行訓練に励んだ訓練生にとつての筑波山の意味を、その死後の世界までも含めて描こうとしている。

訓練生は筑波山を目指して飛行し、筑波山を日々体感していた。『筑波日記』から訓練の日々と筑波山に言及された個所が示され、子孫の供養を受けることができない「国のために戦って死んだ若人」の霊を、筆者は「筑波山にとどまっているように思える」と結んでいる。「筑波山は、こうした訓練生のまなざしと想いを、どのよう

## 第二部 「筑波山から学ぶ」からの展開

第六章では、筑波山および周辺地域における経済の特徴とその構造の変化について明らかにし、同地域経済の今後について展望することを課題としている。



まず、つくば市の人口と地域産業構造の変化とその特徴が図表とともに示されている。研究学園都市建設以降、学術研究をはじめとしたサービス業の発展に基づいた第三次産業中心の産業構造へと変貌を遂げていることが特徴として挙げられる。また、筑波山周辺とサイエンス施設という観光資源があり、農業も「北条米」だけでなく、天然芝やネギ、昨今ではブルーベリーへと多様な展開を遂げていることも指摘されている。今後の展望としては、研究・教育機関の集積を起点とした発展軸と、筑波山とその周辺の観光資源を起点とした発展軸が想定されるが、種々の点で「筑波」と「つくば」が相補的に補い合う地域的連携の重要性が唱えられている。

第七章では、筑波山麓地域がどのような「まちづくり」の文脈に置かれているのか、その歴史的経緯を、行政資料や各種刊行物を手がかりとし、筑波町時代、つくば市合併以後からつくばエクスプレス開通まで、つくばエクスプレス開通後の三期に分け、「つくば」と「筑波」という観点から概観している。さらに、現在、地域でアクティブに活動する「まちづくり」の団体を網羅し、分類を行い、その位置づけと関わりを総体的に示している。そして、筑波山麓地域での「まちづくり」活動には、自然と歴史の豊かな懐かしい空間というイメージを創ろうとする「まとまり」がある一方、個々の活動間の「つながり」が薄い点を指摘している。

筆者は地域づくりを、地元へ愛着を抱く、「地元住民」と「よそ者」との相互作用の中で、地域についての新たな見方を可能にしていく「編集」のプロセスと提示している。